

## 学部生が参加者の大半を占める国際ワークショップの準備と実施

### - その2 「小グループ制」を取り入れたグループ活動の可能性に関する考察 -

正会員 ○ 谷口 弘和\*<sup>1</sup> 同 加藤 浩司\*<sup>2</sup> 同 辻原 万規彦\*<sup>3</sup>

7. 都市計画 - 9. 教育と資格 都市計画  
作業、提案、コミュニケーション、参加意識、アンケート

#### 1. はじめに

その1を受ける本稿では、グループBを事例として提案にいたるまでのプロセスを解明し提示する。グループBの特徴として、流動的にグループを2分割して少人数体制で議論や作業を行う方法（以下、小グループ制）をとった。そこで、こうした議論や作業のやり方が、グループ作業に対してメンバーの前向きな関わりを生み出す上でどのような意味を持ったのかを、筆者1を除く日本人学生4名を対象に行ったアンケートを通して考察する。アンケートは、メールにより、10月13日に配布して10月20日に回収した。設問は、項目1：小グループごとの取り組み、項目2：小グループ制の評価、項目3：WSについての意識・感想、項目4：個人の経歴（専攻分野、WS参加経験など）の4項目である。このうち、項目1～2の構成については、図1にまとめるとおりである。また、グループ活動の経過を振り返る際には、話し合い内容を記録したボイスレコーダーのデータを用いた。

項目1	項目2
セクション1～4で参加した各グループについて回答 コミュニケーションの取りやすさ (5段階評価/評価理由を記述回答)	全日程を通じて コミュニケーションの取りやすさ (5段階評価/判断理由を記述回答)
セクション1～4で参加した各グループ作業について回答 グループ作業に臨む姿勢 (5段階評価/評価理由を記述回答)	全日程を通じて 自分の参加姿勢への影響 (5段階評価/判断理由を記述回答)
小グループごとの取り組み (各人の取り組みの振り返り)	全日程を通じて 提案の質的向上 (5段階評価/判断理由を記述回答)

図1 アンケート項目1・2の概要

## 2. グループBの概要

### 2.1 グループの構成

グループBは、韓国人学生3名（B5…2名、B4…1名）と表1に示す日本人学生5名で構成された。両者の特徴として、日本人学生の所属研究室は多岐に渡り、物的環境の有り様をそのものだけでなく、広い視野の中で捉えようとする傾向があった。一方、韓国人学生は所属する研究室は無いが、全員が共通して物的環境の有り様に強く関心を示し、焦点を絞って環境を捉えようとする傾向が見られた。また、チューターは学生の

意見を尊重しつつ、適宜アドバイスを行う方針であった。

表1 グループBの日本人メンバー構成

NO.	国	所属研究室	学年	WS参加回数
1	日本	都市計画系	M1 (リーダー)	2回
2		建築計画系	M1	1回 (国内)
3		都市計画系	B4	無し
4		環境工学系	B4	無し
5		建築計画系	B3	無し

### 2.2 メンバーのWS参加前の意欲

アンケートの項目4に基づけば、大学院生であるメンバーNo.1・No.2は、WSに対して意欲的であった。例えば、No.1は「過去のWSの体験を活かす様心がけた」と述べた。また、他のグループはM2がリーダーであるのに対し、グループBはM1 (No.1) がリーダーなので、No.2と協力してグループを引っ張っていかうという意思があった。一方、学部生であるNo.3・No.4・No.5は、WSの経験がないことから「やっていけるのか」「任せておこう」と述べており、不安や消極的な気持ちがあった。

### 2.3 グループBの提案

グループBの対象地である真浦・加世浦地区は急斜面の山と海岸に挟まれた平地にある民家が密集した漁村集落である。WS準備期間では、既往研究調査<sup>註1</sup>により、現在の集落での生活と比較しながら、過去において漁業と住民の生活がどのように結びついてきたかを中心に調べた。そのうえで、10月20日には、まち歩きと住民へのヒアリング調査を行った。住民からは「草が伸びていたら隣の敷地でもついでに草むしりをしてあげる」という話などを聞くことができ、この地区には、豊かで弾力のあるコミュニティが形成されていることがわかった。



写真1 真浦・加世浦地区



写真2 地区の空き家・空き地

その一方で、漁業の衰退による人口の流出と過疎高齢化を原因とする地区内の空き家・空き地が増加していることをこの地区の問題点として捉えた。これらのことをふまえ、地域住民との交流を通じて、観光客や牛深を出て行った人(以下、ターゲット)の移住を促進する提案を行った。提案の主な特徴は、以下の4点である。

- 1) 地区内にある空き家・空き地の一部を利用してシェアキッチン・共同浴場を計画する。
- 2) シェアキッチン・共同浴場を地域の人が管理・運営することでターゲットとの交流の機会を創出する。
- 3) 空き家の水廻りをシェアキッチン・共同浴場が担うことでハード面での移住の基盤をつくる。
- 4) 地区内を巡るルートを設定し、利用を促進する。

### 3. 小グループ制での作業プロセスと評価

#### 3.1 グループ編成と作業内容

アンケートと筆者の記録物に基づき、小グループ制による作業がいかに進められたのかを中心に、グループBの作業過程を図2(【】内は、小グループを構成したメンバーを表す)に示す。図中のとおり、グループBの作業過程は、小グループの編成理由から4つのセクションに分けられる。ここで特徴的なことは、セクション1では議論を効率よく進めるためにグループ編成を行ったのに対し、セクション4では議論の質を高めるためにグループ編成が行われたことである。また、グループBの運営は、全日程を通して、No.1とNo.2(筆者1)がリーダーシップを執った。グループ編成やそれぞれの作業内容も、No.1・No.2が中心になり決定し、編成された小グループには、いずれかが入ることとした。こうしたやり方としたのは、No.1・No.2が他のメンバーに比べてWS参加経験が豊富であったこと、グループ作業に対する消極的姿勢が韓国学生に見られたことに起因する。

#### ①セクション1におけるグループ編成

作業①(図2中の①事前準備の確認と方向性の決定を表す/以下同様)の日本組は、日本人学生が韓国学生よりも先に現地入りし議論を開始していたので、日本人学生の意見をまとめるために編成された。韓国組は日本組の議論を共有した後、韓国学生の中で意見をまとめるために編成された。このように、セクション1では議論がしやすいように小グループを形成して議論を行った。

#### ②セクション2におけるグループ編成

作業②のフィールドサーベイ組は事前にまち歩きをしているNo.4・No.5がまち歩きをしていない学生を案内するために編成された。ヒアリング組は少人数のほうが活動しやすいこと、提案の核になるヒアリングを大学院生が行った方が良いと判断したことから編成された。

#### ③セクション3におけるグループ編成

作業③、④では、まち歩きでの興味の差異からグループ編成を行った。日本組は日本人学生がまち歩きで得た情報を整理し、韓国学生と共有しやすくするために編成された。韓国組も同様である。ソフト組は大学院生が主にヒアリングを行ったこと、学部生から提案の仕組みについて積極的な意見が出ていたことから編成され、ハード組は韓国学生が民家のファサードや建築材料に着目したことから編成された。このように②、③では、メンバーの特性や集落の捉え方を判断し、中間発表に向けて各人が得意とする作業ができるように編成を行った。

#### ④セクション4におけるグループ編成

作業⑤、⑥のミクロ組はNo.2が物的な環境に強く興味を示し、グループ内で一番、韓国学生と議論していたためハード組に合流し編成された。マクロ組は提案の仕組みについて積極的な意見を出していた学生を中心に編成された。セクション4では、中間発表での「日本人

日程	8/20		8/21		8/22		8/23	
全体の動き	チーム合流		開会式		中間発表		最終発表	
グループの動き	①事前準備の確認と方向性の決定		②まち歩き		③まち歩きの情報共有		④中間発表準備	
					⑤中間発表での指摘の改善		⑥最終発表準備	
編成理由	セクション1 ①意見をまとめるために編成		セクション2 ②作業効率を考慮して編成		セクション3 ③、④まち歩きでの興味の差異で編成		セクション4 ⑤、⑥提案を総合的に捉えるために編成	
小グループの構成と作業内容	<b>① 日本組【1,2,3,4,5】</b> ・九州組と千葉組の意見交換・既往研究の報告 ・方向性の検討 ・まち歩きの着眼点検討  <b>韓国組【韓国学生】</b> ・日本組の方向性確認 ・韓国の事例紹介		<b>② フィールドサーベイ組【3,4,5, 韓国学生】</b> ・空き家、空き地のプロット ・ファサード写真収集  <b>ヒアリング組【1,2】</b> ・住民へのヒアリング(風習、暮らしぶり)		<b>③ 日本組【1,2,3,4,5】</b> ・漁業の衰退、過疎高齢化データ集め ・人口流動の把握  <b>韓国組【韓国学生】</b> ・民家の建材調査 ・民家の意匠デザイン調査		<b>④ ソフト組【1,2,3,4,5】</b> ・地域住民との関連付け ・共同浴場の提案 ・マスタープラン作成  <b>ハード組【韓国学生】</b> ・デザインソースの選定 ・シェアキッチンの設計	
提案の変遷	観光客をターゲットに地元の食文化を活かすという意見を基に、シェアキッチン計画し、情報発信と地域住民との交流を目指す。		集落の文脈を取り入れ、地域住民との交流を提案の核にする。		空き家を利用して共同浴場も計画し、地域住民が管理を行う仕組みを提案。また、韓国側の視点を基にシェアキッチンのディテールの設計を行う。		集落を巡るルートを設定し、ハードとソフトの関係性を持たせる。	
							クリエイターを移住者のターゲットとし、集落の将来像を明確化。	

図2 グループ作業の時間的な推移

学生と韓国学生が別々のことをしている」という指摘をふまえ、意見の調整を図るとともに提案を総合的な視点で捉えるため、日本人学生と韓国学生が混ざるように編成を行った。

### 3.2 コミュニケーションの取りやすさ

コミュニケーションの取りやすさの評価方法についてはアンケート項目の 1) 小グループごとの取り組み、2) 小グループ制の評価の 2 点を基に評価する。図 3 は、各セッションにおけるコミュニケーションの取りやすさについて各人の評価（5 段階の尺度で主観的に評価）をグラフにしたものであり（図中の作業①などは、図 2 中の①などに対応し、No.1 などは表 1 中の No. に対応する）、グラフの下部には、各セッションについての評価理由として記された主な回答を示す。ここで特徴的なことは、小グループ制を取り入れ、流動的にグループを再編成することによって、1) セクション 1 において不安を抱いていた学部生のコミュニケーションの取りやすさ、2) 日本人学生と韓国学生間のコミュニケーションの取りやすさの 2 点が向上し、総じてグループ全体でコミュニケーションが活発に行われるようになったことである。

#### ①セッション 2 におけるコミュニケーションの取りやすさ

No.3・No.4 がセッション 2 で、セッション 1 よりも、コミュニケーションが取りづらくなったと感じており、その理由については「通訳の方がいなかったのと思うように話せず、簡単な会話しか出来なかった」「韓国学生と話せなかった」と述べた。これは主に韓国学生とコミュニケーションを取っていた大学院生が作業②で別の小グループになったことが原因と考えられる。逆に No.5 は「通訳の方がいたので助かった」「少人数で調査を行ったのであまり緊張しなかった」と述べた。他の学部生と対照的な回答をしているのは、通訳が近くにい

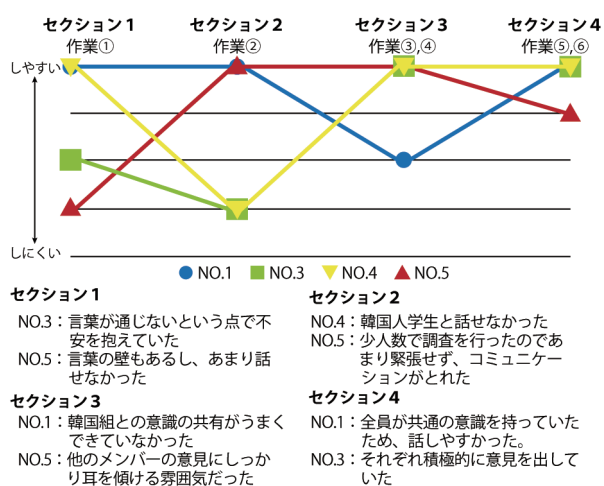


図 3 コミュニケーションの取りやすさの変遷

ためだろう。これらより、セッション 1 では、大学院生や通訳が入ることで、学部生が韓国学生とコミュニケーションを取れていたこと、小グループの活動が学部生の緊張の緩和を促したことがわかる。

#### ②セッション 4 におけるコミュニケーションの取りやすさ

No.1 は、セッション 3 では韓国側との意識の共有が上手くできていなかったと述べたが、「全員（日本・韓国）が共通の意識を持っていたため話しやすかった」と述べており、セッション 4 においてコミュニケーションの取りやすさが向上したといえる。これは、3.1 で述べたとおり、チューターの指摘を受けて、グループを再編成したからであり、グループ編成を流動的に行うことがコミュニケーションの取りやすさの向上につながったと考えられる。また No.5 がセッション 4 においてセッション 3 よりも話しにくいと感じており、理由として「時間がないのと、自信があまりないので自分の意見を述べることをためらうことがあった」と述べた。これは、小グループ内の雰囲気の影響したのではなく、個人的に WS の日程を考慮した結果だといえる。

#### ③小グループ制の評価

項目 2 では、コミュニケーションの取りやすさを促すという点で、小グループ制は効果的であるとメンバー全員が答え、理由には以下の 2 点が挙げられた。1) グループの人数が少なくなることにより、メンバー全体で議論するよりも発言機会が多く創出される。2) 議論をする相手が限定されることにより、メンバー間での意思疎通が捗り、議論が円滑に進みやすくなる。しかし、リーダーであった No.1 は、それぞれのグループが同じ認識を持たずに小グループに分かれると意味を成さないように感じたと述べており、小グループ制はコミュニケーションの取りやすさを向上させる上で効果的である反面、小グループ間での意識疎通が行われにくいことがあると指摘した。

### 3.3 各メンバーのグループ作業に臨む姿勢への影響

グループ作業に臨む姿勢への影響の評価方法についてはアンケート項目の 1) 小グループごとの取り組み、2) 小グループ制の評価の 2 点を基に評価する。図 4 は、各セッションにおける個人の参加意識への影響について各人の評価（5 段階の尺度で主観的に評価）をグラフにしたものである（図中の作業①などの表記は図 3 と同じ）。グラフの下部には、各セッションについての評価理由として記された主な回答を示す。ここで特徴的なことは、メンバーの WS における活動意欲は、意欲は、総じて高まっていることである。少なくとも、低くはない。

### ①セクション2における個人の参加意識への影響

No.3・No5が「地図を持って案内する形だったので積極的に動きました」「空き家のプロットを任せられた以上責任をもってやろう」と述べており、セクション1よりも自分の役割が明確になり、なおかつその役割を果たすことができると考えられたため、グループ作業に臨む姿勢の向上につながったと考えられる。

### ②セクション3における個人の参加意識への影響

セクション3では、メンバー全員の参加意識が消極的になった。「プレゼンはNo.2に任せっきりだった」「ついていけなかった」「発表準備は積極的に参加したが発表はしなかった」などの回答から、中間発表で日本人学生の発表をNo.2のみが行ったことが原因であると考えられる。

①、②から、主体的に作業に取り組むことができるかが個人の参加意識に影響しており、小グループ制を取り入れることで、個人の作業が明確になり参加意識が向上した。

### ③小グループ制の評価

小グループ制で作業を進めたことは3.2で述べたとおり、学部生にとって当初抱いていた不安解消やグループ作業に主体的に関わる意識の萌芽を促すという点で効果的であったと考えられる。その根拠は、項目3では、「始めは不安だったがやることがわかってきてこれならやっていると確信した (No.5)」「同世代の人たちが頑張っているのを見て、これは投げている場合ではないと思った (No.4)」という回答が、項目2では「意見を述べる機会が増え主体的に提案に関わっているという意識が増した (No.2)」との回答も挙げられているからである。このうち、後者に基づけば、小グループ制により、議論に活発に参加できる環境が創出され、それが個人の参加

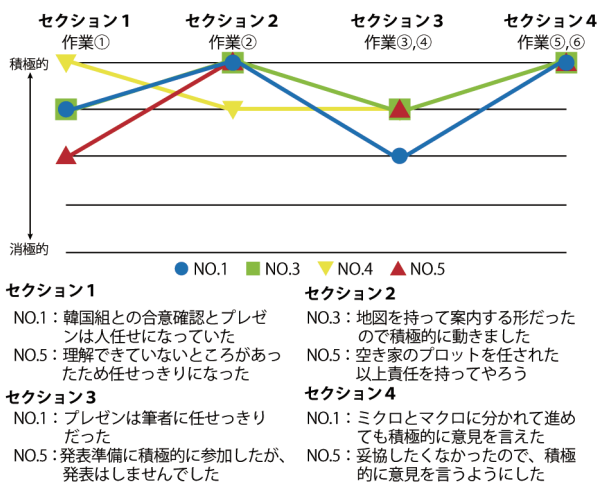


図4 個人の参加意識の変遷

\*1：大阪市立大学大学院工学研究科  
 \*2：有明工業高等専門学校建築学科 准教授・博士（工学）  
 \*3：熊本県立大学環境共生学部 准教授・博士（工学）

姿勢にも影響を与えた可能性も窺える。ただし、NO.1が小グループに関わらず意見を言えたと述べたとおり、NO.2も含めて大学院生にこうした効果は認められない。

### 3.4 提案の質的向上

提案の質的向上への貢献については、1) 提案の変遷 (図2)、2) アンケートの項目2より、作業効率が上がったことに加えて、異なる視点からのアイデアを積極的に生みだしながら提案の具体性を増すことができた点で、小グループ制が効果的であったと考えられる。このうち後者については、例えば、セクション3において、韓国人学生の意見を取り入れキッチン細部の検討したことである。また、「上手くグループに分かれて作業分担が出来たおかげでより具体的な提案になった」「2、3日ではここまで練り上げることはできないし、自分では簡単に思いつくことの出来ない他のメンバーの発想に出会えた」という回答からもその様子が窺える。しかし、異なる意見をぶつけあう中でグループとしての提案をまとめられたかと言えば、提案内容は大学院生が中心となり定めた一定の枠内にとどまったといえる。小グループの編成と作業内容を大学院生主体で決めていた上、作業①で提案の方向性が決まった後は、その根幹について大学院生とその他のメンバーの間での議論を行っていないからである。

### 4. まとめ

本稿では、状況に応じて流動的にメンバー編成を行いながら、少人数体制で議論や作業を行うグループ運営の方法をWSで取り入れることについて、1) 様々な差異を持った学生同士のコミュニケーションが活発になる、2) グループ作業への参加意識を高め、メンバー全員が主体的に活動できる、3) 作業効率が高まる、4) 異なる視点からのアイデアを積極的に生みだしながら提案の具体性を増すことができるという点で、その有用性が認められると考えた。一方、課題としては、5) 提案をグループとしてまとめるには、小グループ間での意思疎通や参加意識調整を図ることや、6) 一定の枠内で提案内容についての議論が進みがちであるゆえ、メンバー間での意見の融合を積極的に図ることへの配慮も必要であると考えた。

【謝辞】 本稿をまとめる際は、横山俊祐先生にご助言をいただきました。WSでは、チューターの北原理雄先生、高田翔くんをはじめ、グループBの皆様大変お世話になりました。深く感謝の意を表します。(高田くん、植田さん、上田くん、牛島さんには、アンケートへの協力も感謝申し上げます。)

#### 【補注】

注1：石橋他、高密度漁村集落における集住作法について、1989年度日本建築学会大会学術講演梗概集（建築計画・農村計画）、pp41-42,1989.9

Student, Graduate School of Engineering, Osaka City University  
 Assoc. Prof., Ariake National College of Technology, Dr. Eng.  
 Assoc. Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.